

丹の由来や効能を記した版木が保存されている（資料編一五）。その由来によれば伝香寺の豊心丹は、後奈良帝の一五二九年（享禄二）管領畠山義忠の求めに応じ明から鄧舜功が来朝して豊心丹の薬方を伝承、これが義忠と親しかった簡井順昭に伝えられて簡井家の「家方」となり、「代々是を衆民に」施与してきたが、順慶が母の本願によって伝香寺を再興した際、この豊心丹の薬法が同寺に授けられ、「代々調合いたし衆人に得さしむる者也」とある。

2 薬種生産

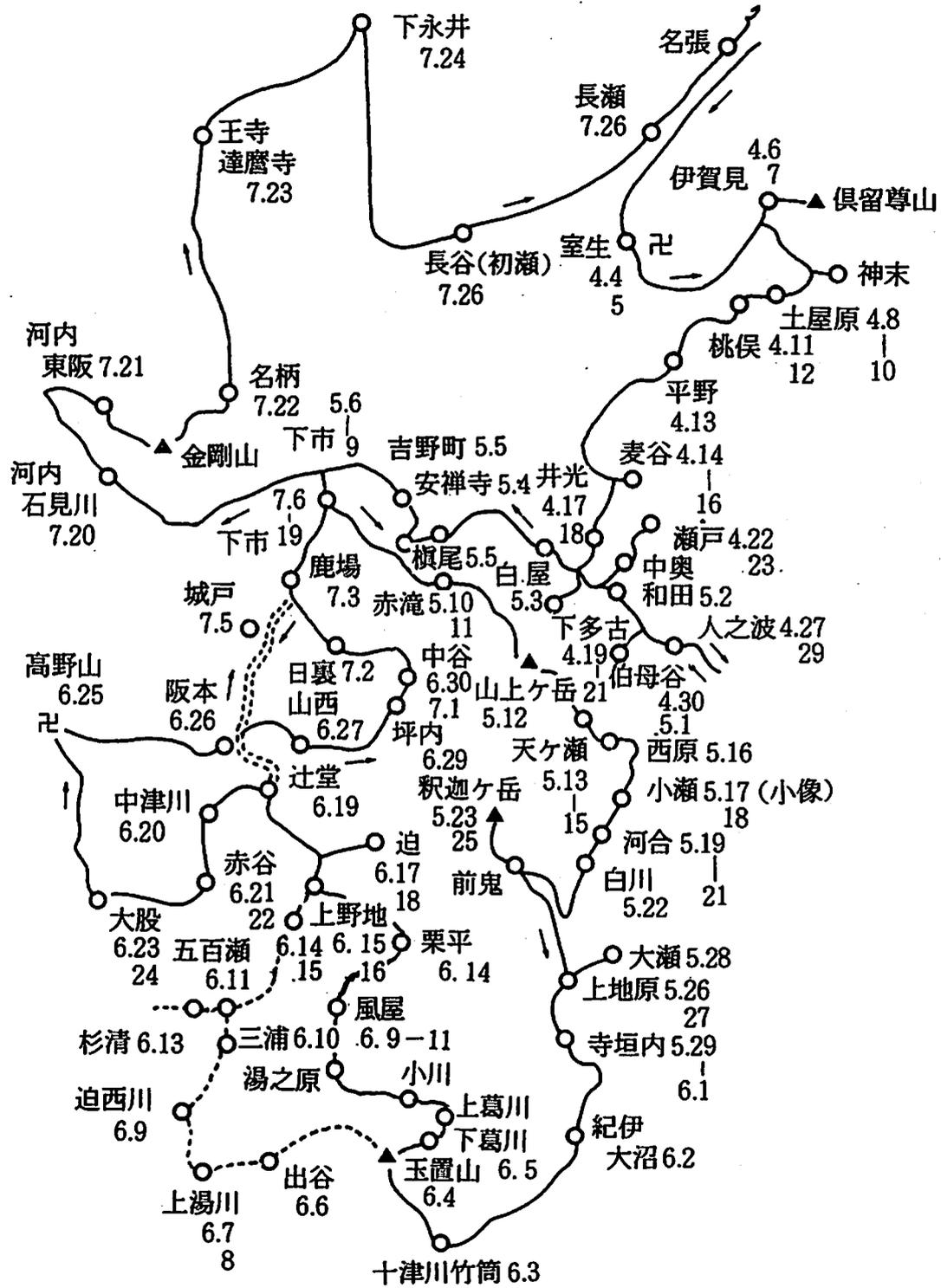
植村政勝 大和とりわけ吉野・宇陀地方は、古くから薬草に恵まれた土地として知られていた。一七一三年の採薬行（正徳三）の『和漢三才図会』は、大和の土産を並べたあと「此外薬草多、出於金剛山一者良」と記しており、一七三六年（享保二）の『大和志』には、宇陀・高市・宇智・吉野など南大和の諸郡で地黄・当帰・人参・大黄などを産出するとある。

売薬業の興隆にともなって、薬草の栽培もしだいにさかんになるが、大和では、幕府の採薬使植村左平次の採薬調査、その結果としての森野・下市両薬園の開設が大きな刺激になった。

実学を奨励した将軍吉宗は、薬草にも強い関心をもち、小石川薬園を拡張整備するとともに各地に採薬使を派遣して薬草の調査と採集にあたらせたが、採薬使の中でもっとも大きな足跡を残したのが植村左平次政勝であった。左平次は一七二〇年（享保五）から三四年間にわたって、八六回も各地を踏査したといわれる。大和へは、一七二六年と二七年にも足をふみ入っていたが、一七二九年（享保一四）「伊賀伊勢紀伊大和山城河内六ヶ国御用」として大和を中心

第2章 大和売薬の成立と展開

図1 享保14年(1729)植村左平次政勝・森野藤助・採薬経路略図
 (大久保信治「森野賽郭と薬園の成立」による。一部補訂)



注.....森野藤助の玉置山から上野地への経路
 注.....森野藤助の鹿場村から辻堂への薬草受取り往復路

に行つた調査は、一五〇日間にわたる大旅行として著名である（資料編に「植村政勝大」和國採薬記写を収載）。この調査に、宇陀郡松山町（現大宇陀町）の森野藤助（初代、諱は通貞、号は賽郭、一七六九）のほかに吉野郡下市村（現下市町）の畠山□長・岡谷喜右衛門・井上孫左衛門、天川郷中谷村（現天川村）の畠中藤左衛門らが、薬草見習として左平次に随行した（森野家文）。藤助らは、この年四月三日伊賀から大和に入った左平次に宇陀郡室生で合流する。一行は俱留尊山（曾爾村）に登つたあとと御杖村を経て東吉野村から川上郷に入り、一九日から三日間雨天のためもあつて下多古で滞在、入之波を見分のと吉野川沿いを下つて五月五日吉野山に達し、六日から下市に滞在して薬園の場所を決定している。一〇日朝下市を出発、一二日山上ヶ岳を越えて北山郷に入り、前鬼から釈迦ヶ岳に登つたあとと下北山村を南下して六月二日紀州に入り、北山村を経て翌日十津川郷竹筒に達し、四日玉置山で泊つたあと、左平次らは下・上葛川をまわり、小川から西進して湯之原に渡り、風屋・栗平を経て上野地に向かい、藤助は西進して上湯川から北上、神納川沿いを調査して六月一六日上野地で合流、野迫川村大股を経て二五日高野山に着く。翌日大塔村阪本に下り、二七日から天川郷を見分して七月六日下市にいたり、一九日まで滞在して下市薬園の開設にあつた。二〇日から採薬行を再開、下市から西下して河内に入り、石見川・東坂を経て二二日金剛山を越え、名柄（御所市）に下つて北上、王寺の遠磨寺にいたつたあとと奈良に向かうが、南郊の北永井から南下、初瀬を経て伊勢街道を東行、二六日伊賀の名張で藤助らは左平次一行と別れた。大へんな強行軍だったが、多種多様の薬草を採取してその成果は大きかつた。

左平次はその後一七三二・三四・三五年度の三たび大和を訪れる。このうち三二・三五年度の採薬行には森野藤助も同行した。藤助はまた、一七四三年（寛保三）の伊勢・美濃・近江の採薬行にも左平次に随行している。

下市の薬園と さきにしふれたように植村左平次は、一七二九年(享保一四)の採薬行の折、二度にわたって下市森野薬園に逗留し、薬園を開いた。彼の「諸州採薬記」によれば、五月六日から薬園の場所選定にあたり、

八日に入札、九日に「堀池薬園場所地改ル」をある。堀池はいまの堀毛、薬園は堀毛神社の裏山中腹あたりでなかつたかという(『下市町史』)。ついで七月六日から一九日まで、ふたたび下市に滞在して堀池薬園の普請にあたり、さきに願行寺に仮植していた薬草を移植するなどして、一七日には薬草の植付を完了している。しかしこの堀池薬園は、その後いつの頃にか廃絶、いまはその跡をとどめていない。

いっぽう森野藤助は、一七二九年(享保一四)の採薬行のあと、幕府から唐薬草木六種(甘草・東京肉桂・烏臼木・天台烏薬・牡荆樹・山茱萸)を拝領、自ら採取した薬草類とともに自家背後の台地上の畑に栽培した。これが森野薬園のおこりである。藤助は早くから屋敷内に薬草類を栽植して本草の研究に従っていたが(一七三二年には和薬の真偽を確かめた「和薬御改扣」を著している)、植村左平次の採薬行に同行して知見を広めるとともに多くの薬草を採集したのである。一七三二年には植村左平次が藤助宅に立寄っており、三四年藤助から左平次に大薬なつめを贈り、翌三五年左平次から藤助に山茱萸・鬱金・菘蓴・肉桂の種苗のほか、枳殼一本・附子二根が贈られている。また同三五年に九種、三七年(元文二)に一八種の薬草木の種苗が下付され、四〇年にも朝鮮人参種一〇〇粒の下付も受けている。左平次の励ましもあって、薬園は着々と整備充実され、一七〇四年(元文五)の目録によると、当時栽培されていた薬草は一二八種にのぼっていたことがわかる。

藤助は、一七四九年(寛延二)家督を武貞(二代目藤助)に譲り、薬園の一隅に書斎兼薬草研究所「桃岳庵」を建てて本草の研究に励み、その集大成ともいふべき『松山本草』全十巻を著した。藤助の子孫も代々本草学に通じ、三代目



桃 岳 庵

藤助好徳が家訓に「三十四十におよひてハ、商売の方を家に老

たる人に予あらかじむつとめさせ、自身は薬草を心がけ、薬園をまもり

てめつらしきを増、たえたるをおぎなひて草木の繁茂を愛し、

年老てハ草木の図状をも拾遺して品多くあらはすを切とすハ

し」と書きとめたように、薬園の拡充整備に努めた。そのためこ

の森野薬園は、数少ない民間の薬園として、今日にいたるまで

よくその命脈を保つことができたのであった（大久保信治「森野薬園の成立」木村博

一先生退官記念会「地域史研究と歴史教育」所収）。

薬 種 生 産

植村左平次の採薬行と下市・森野両薬園の開
設は、大和における薬草の栽培と薬種商の台

頭を促すことになった。

森野家の三代目藤助好徳（一七五六一八一〇）の筆になる「大和国出産之薬種御尋ニ付奉申上候書付」（森野家文書三）というのが

ある。一八世紀末から一九世紀初めのころのものともみられるが、そのころ大和のどのあたりでどんな薬草が作られた

り採られたりしていたか、およそのことをうかがうことができる（当時宇陀郡は、大半が幕府領、一部が旗本領・藩領にな

っており、筆者の好徳が幕府領松山町に住んでいた関係で、「当御支配所」、「当御支配所并当郡村々」と使い分けしているが、以下

両者を一括して宇陀郡とし、その大要をみることにする。

これによると、地黄・川芎・当帰・紅花（ただし少々）は宇陀郡村々及び大和の所々で、白芍薬・赤芍薬は宇陀郡其

外所々で少々宛、白芷・黄芩はもっぱら宇陀郡の村々で（其外近辺でも少々）、牛膝は宇陀郡の村々で少々宛（其外近辺で）作られており、赤芍薬と牡丹皮・白朮は吉野郡下市奥で多く作られ、直根人参（吉野人参）は吉野郡で作りに出されているほか（伊勢川俣谷・伊賀・紀州・山城などでも作るとしているものもあるが省略）、延胡索・貝母・烏薬・玄参・隠羊藿などの唐種が、森野薬園で独占的に栽培されていたようである。また、山野に自生するものとして、羌活・独活・前胡・龍胆・吉梗・天花粉・沙参・天麻・桑白皮・遠志が宇陀郡で掘出され、山芍薬は宇陀郡と吉野郡山中、葛根は宇陀郡と金剛山、直根人参は宇陀郡の深山で少々、吉野郡中で多く掘出されるほか、草烏頭は金剛山、細辛は大峰山中、大乙余糧は生駒山中、石南葉は大峰と吉野山にあるとしている。

また、大和国御料私領惣代から、和薬株・油株質株・古手道具古金屋株など株仲間の統制に反対して、一八一四年（文化一一）営業の自由を求めて出された歎願状（片岡家文書）に、「当国惣百姓共手作之和薬（和薬種のこと）等百姓共心儘に京大坂表江心儘送込売捌候」などとある。近世の後半薬種の栽培あるいは採取がさかんになってきたことがうかがえる。ちなみに一八四七年（弘化四）の『和州吉野郡名山図志』によれば、天川郷について「人家吉野人参を作る、又草芍薬・当帰・川芎・前胡をも作る……或は芍薬を掘て渡世す」とある。

薬種の生産や採取がさかんになるにともなって、薬種屋もあらわれてきた。その多くは「私共義農業手透之時節ハ、少々ツ、薬種商売仕候所」（辻家文書）とあるように、農閑期の副業として営んでいたとみられる。さきあげた「大和国出産之薬種御尋ニ付奉申上候書付」によれば、森野家でも薬園を経営するかたわら（カタクリ粉の製造にも従っていた）薬種を商っていたようである。地黄・白芍薬・赤芍薬・前胡・葛根・天花粉・紅花・直根人参（吉野人参）・牡丹皮・沙参・桑白皮・白朮について「取扱罷在候」とあり、薬園で栽培している延胡索・貝母・烏薬・玄参を「売弘罷

在候」とある。

薬種屋は、一七八三年(天明三)合薬屋とともに薬種合薬屋組合株仲間を結成するが(後述)、今住組(葛上郡・高市郡)では、幕末の一八六〇年(安政七)・一八六三年(文久三)に、それぞれ薬種屋九人・一〇人、和薬種屋一三人・二二人を数えている(表三七ページ)。(表三参照)。これらの薬種屋は、集荷した薬種を薬剤の原料として地元合薬屋に供するとともに、その多くを大坂道修町の薬種問屋に送ったものとみられる。

表1 1874年(明治7) 府県別薬種・製薬生産額(各1万円以上)

	薬種	製薬
	円	円
新川県	5,462	86,456
京都府	3,560	45,003
奈良県	30,670	3,560
大阪府	671	165,603
鳥取県	78,840	—
若松県	44,026	1,322
長野県	25,548	—
栃木県	21,725	—
堺 県	10,526	—
度合県	11,694	8,303

(『福業寮編明治7年府県物産表』による)

薬種の生産状況の代の史料はないが、明治初年について

表2 明治前期薬種生産地

川芎	室生	竜門					
白芷	曾爾	多武峰	竜門				
当归	宇太	宇賀志	高市	阪合部	南芳野	秋野	下市
	白銀	宗檜	大塔				
防风	宇太						
茯苓	神戸						
葛黄	宇賀志	宗檜					
地黄	城嶋	香久山	安倍	多武峰	坂合	高市	
百合根	多武峰	阪合部	竜門	秋野	下市	白銀	
牡丹	阿田	南芳野	秋野	下市	白銀	賀名生	
芍薬	阿田	大淀	南芳野	下市	白銀	賀名生	宗檜
桔梗	高見						
呉茱萸	下市						
山茱萸	白銀						
木香	下市						
莫茱萸(茱萸)	白銀						

(『大和町村誌集』による)

は若干の史料が残っている。幕末とそう大差はなかったとみられるので、これによって幕末の状況を察することにしよう。

一八七四年（明治七）の「府県物産表」によると、表1にみられるように奈良県（大和）の薬種生産額は三万六七〇円で、鳥取県（七万五八四〇円）、若松県（明治九年福島県に合併、四万四〇二六円）について第三位を占めている（薬種別の生産額については^{（七二ページ）}表3参照）。幕末の大和は、すでに全国有数の薬種生産国だったといつてよいであろう。

『大和町村誌集』によって一八八二年（明治一五）ごろの大和の薬種生産地をみると表2のとおりで、宇陀・吉野・高市の三郡を中心に二三か村に及んでいる。宇陀郡については一八七九年（明治一二）の詳しい「産物調書上帳」^{（森野家文書一七）}があり、これによると当時宇陀郡では、川芎・白芷・当帰・防風・葛・芍薬・桔梗・呉茱萸・木香のほか、大黄・黄芩・瓜蒌根・羌活・独活・前胡の生産があり、地黄については地味不適、高値のとき臨時に作ることもあるとし、龍胆については原野に自生するも掘ること少しとしている。このうち白芷の生産が圧倒的に多く二万九五五〇斤、六四七戸・一〇五五人がその栽培にたずさわっている。ついで川芎の七五六〇斤が多く、「産業戸数」八五戸、「産業人員」六四八人とある。以下五〇〇斤以上の生産高のあるものを拾うと、その栽培戸数と人員は、芍薬六九戸・二七〇人、呉茱萸四八一戸・六四五〇人、当帰九六戸・五四五五人、前胡二七六戸・一四〇〇人、桔梗三一七戸・一四〇〇人、黄芩二六二戸・四〇〇人を数えている。これらはいずれも明治前期の状況を示すものであるが、幕末においても、薬種生産がさかんだったことをうかがわせるに足るものといえよう。